



續

頁

百川書園

特別
~ 5
6547





白鳥



朝の橋と文をとり白鳥は
如く如く物にあたりし
し理をゆく青城に陣を
のたふある世の世の探る
見者人の世の世の探る
心ゆくゆくいひの世の世

松魚

其のくくや喜白此居をり鯉

泊洲

鯉

蟹中自若く池とあしる初鯉

山夕

鯉

水多や鯉を釣しぬわしす

青岷

白魚

白魚の鱗あつらふと魚ももの

貞佐

鮎

張者ハ非切く如あせ子持鮎

和推

松魚

掘く掘りゆ魚は鮎の柱あり

暴室

魚魚

若神のこゝに居りてさし鯉

成屋

海老

淺魚の美若く又さし海老

貞山

うめさ

眠りや草の海菜獲つるさ

水國

花鱒魚

鮎鱒やほり王のさしと鯉魚

來川

ほつ平岡

物枯るるを二夜のり平岡

超波

難喉

原の心の意れを流し雲難喉

永機

白臭

急居を流

沾恭

哉白臭れ

豆の月



守輝馬

白鳥の 花中とを別ありも花
浪城 院 細 雪 夜 の 梅
あゝ鳥や 星と流るゝ 鷹 舞
あゝ鳥や 痛くも 涙 梳 雨 後
白鳥や 着 袴 袴 同 心 也
あゝ鳥や 如くも 上 の 姿 如 那
白鳥や 流 士 共 何 々 好 漢 如 船
あゝ鳥や 唐 氏 揚 州 死 何 山 道
あゝ鳥や 中 外 雇 り 思 ち 方 の 川
白鳥の 月 也 亦 丈 人 心 入 道 徳

貞磨 松雨 露宇 菊秀 木雪 知風 雨騷 花情 義鏡 村子

あゝ鳥の 白鳥並へ 糸 屋 女
白鳥も 鳥 宛 あり 世 人 心 如
あゝ鳥や 嘉 兵 衛 の 山 前 新 里 的 り
白鳥の 織 物 也 亦 深 衣 美 術 一
白鳥や 麻 衣 載 せ 々 幸 へ 揚 げ
白鳥や 生 れ の ち の 糸 細 工
あゝ鳥や 形 事 成 じ か 々 也 一
あゝ鳥や 著 丈 目 白 鳥 梳 梳 の 後
白鳥や け け け け 二 三 三
白鳥の 井 月 並 々 景 如 那

檀志 浮月 可有 柎蝶 牛渚 梅里 琴月 女和 其高 管子

羽二重に細くわたり白鳥也

化粧せし身は白鳥のうきもれ

白鳥也かこし水鏡の清き水

白鳥也や春日に於て神の依

ふらふら

春のまじりてはるのうきもれ

る軒貝

る軒貝也きとくはるのうきもれ

蛤

るのうきもれ蛤のうきもれ

沿岸

里虹

文鴻

昌車

松葉

昌車

雨流

昌車

昌車

昌車

蛤のうきもれきとくはるのうきもれ

るのうきもれ蛤のうきもれ

るのうきもれ蛤のうきもれ

るのうきもれ

るのうきもれ蛤のうきもれ

るのうきもれ蛤のうきもれ

るのうきもれ蛤のうきもれ

るのうきもれ蛤のうきもれ

るのうきもれ蛤のうきもれ

るのうきもれ蛤のうきもれ

芟水

晋山

千山

咫玄

青主

松女

青主

文紋

秋蝶

秋蝶

鱒

ふんふん作る白魚鱒の風

貞子

鱒

日本の鱒を鱒まの富生

吟里

貝柱

嘗て貝の柱も掛るあや

沾写

汐や干れ乾くと大おまゝ貝柱

素雉

手懸鱒

おろしを糸あより鯛の都り度

梅婦

いとくちや枝婦も如の浦かす

尹督

沙魚

魚橋の糸あより小沙魚

秋暁

人といさきこれに沙魚の夕涼

寸松

鮎

この鮎の老屋より鮎糸

蘭女

川枝や鮎の糸人の夕涼

松江

虫がく星の鮎の小鮎の糸

清江

糸の鮎や糸あより川の鮎

儿杖

鮎

たもあより糸あより鮎

青芝改
萬里

尾月より引せたりくぬ 鶴の烟
圓解りの藤より見せしむる 鶴の如
鶴亦らうわの平をあたふ 鶴の使
糸方の流ハ門書ゆ 鶴の如
えこのこや梅まのぬ 鶴の鶴

鶴

香札乃る鶴の流をせ 鶴の如
ありとや 鶴の如の玉の如から 鶴
藤音十のちを古 鶴の如
ぬひ 鶴の如を月をさう 鶴の如

月夕
近谷
万里
一芦
寸魚

端詞
不珍
琴紫
如水

新市やその十月乃十九の夜
阿田川新の流の如の柳の如
屋かくしやま 鶴の如

鶴

厩後の香とあしよ 鶴の如
和音りやまや 鶴の如
鶴の如

鶴

見せ物や柳の如乃 鶴の如
大抵とて 鶴の如

水光
一笑
北極
あつち

淡丸
匙林
松古

露優
可十

とせむつ子海老まき子車花車

比目

塩車

三尾谷とむしあけりあ海干あぬ

素枰

と一夏の夜も中へこ花のむしあぬ

笙翁

とつとせむつ子海老まき子車花車

輿

何虹

海多んかま

豆餅とと海干とよとのの穴の形

釋玄牧

とあ海老まき子海老まき子車花車

泉川

鮭

鮭のや梅と夜乃あは所

逸志

干鮭のや梅と夜乃あは所

茨雞

高帽子網

よあ海老まき子海老まき子車花車

井住

わのたのい

このあは海老まき子海老まき子車花車

泊雲

鮭

管のや梅と夜乃あは所

桃億

鮭

釣まき子海老まき子車花車

千々

ぬ

く〜貝

まはれかけし列子後をたれ〜貝

龙契

田螺

まの那を合〜やま日田螺摘

可叟

黒網

まのまの〜網を〜

我矢

あ〜あ

あ〜あ〜やま風ら列澤の上落居

琴糸

ま〜み

清んこの清んま〜ま〜

問松

飯

春と家飯〜春飯意と〜

来志

御干

奇仙

田舎の飯〜耕田御干〜

櫻里

膳を〜〜麻〜〜〜

文鳩

夕なれ〜〜〜

破窓

酒は清の〜〜山〜〜

曉扇

笛の〜〜〜

舒嘯

裸と列〜〜〜

一葦

煙い橋を来るとも芝居の、高生
水と路亦如電浮れ初の花
水せとる橋入おのりもんこ
俗傳はと改り荒蕪橋紙
おの韻のかう前へ世評とめけ
下流へ一、大、級計の骨
徒舟へ八月の冬に於て去る
流るるよと臆へ月えかこめく
流くや、本名のかひく、一、急、水
百了あし、言中、の、く、と

吟風 簫山 玉壺 繡蝶 未考 沅水 湘水 柳山 蘭水 鷺洲

洞澤の代を腹報花よつ
源流の面おハ館の下朝
肩とて平やもを流いさす
野知のさあて、く、大、海、の、塵、土
元請の梅、く、歌、痛、も、昨、日、か、く
還俗、く、地、垣、細、く、一、伊、色、色
中、指、ま、え、道、志、く、く、く、野、生、門
人、く、お、さ、く、く、糸、晴、ま、持、り、融
身、を、お、く、ま、ま、せ、も、根、の、祀、を、お、お、
く、は、く、く、ま、く、く、ま、ん、陰、の、囀

虚舟 藻虫 芝室 柀志 河未 誰侶 鬼嶽 艮止 似川 喜紅

ちの海河の凡言わつる葉の塵
 傍心もさるる奇れ見かろ
 空を舞舞舞の七日花七日
 白鳥折あか——海波報
 浪絶平河あつや並木のす三節
 水の巻流 雲—— 鳥傳
 空見くのろはさ文飲草の記
 口流もさるるど角力取りとの
 名
 お月依はまはらまるとは海鼓鼓
 又千度の打く新旨ふあふ心

昌車 坡竹 西隻 中和 文鴻 緑之 坡竹 文鴻 中和 雨隻

大志の例よ馬留子を腰くの冷へ
 主実くこのま流んくも中暖
 湯直腐のぶく 嚏 華 鳥院
 籠り吹せく 木のかけ聲
 坂道の朝日連 冬命 お高
 鳴流の中の中乃小佛
 海さあさるる響あく入道とこよかけ
 あせり打絶女もあさる解
 くつらあか月も腕を解てあせ
 鼻ささるる度改動なり小役

緑之 昌車 文鴻 坡竹 中和 緑之 雨隻 文鴻 昌車 中和

雨ふるふとわしはあはれにみせし
 伽藍の鐘をききし女はすて 秋友
 修理の鐘をききし女はすて 秋友
 夜は遠く都へ行く川の山への
 春の夜の記はあはれにみせし
 帰るあはれにみせし

坡竹
 雨隻
 沾仙
 緑之
 沾写
 沾叙



春門
 暁志路
 角海々

守輝画

今之臭

老子母終尻比其尾の骨よ長連臭

鯉

初加川かなる海と沖代の古方かき
桃くけや木のり陰のそあ加川
相乗る愛日陰とかあともあも
峰起るき山と流るぬく初加川
高美多や故帳の細り一鯉か
鯉と愛おやや田原の又と
若ととも底よ芳ゆく初加川

れ

暴瀨

喜弾

口風

喜締

簞笠

専水

濃洲草
如臭

細く臭

竿の尾くもあのことろく

何竹

海尻

友指道の箱高とあき海尻
中の所きこし海尻の好く

素丸
蝶也

線

如女の口か海とあき線

長風

河級

右月の河級夜市のり流る瘦加

林里

思ふ後の瀬や川を流る河縁男
河縁女も自ら花を摘むあはれ
まき鳥と四葉く流るる露水

乾舞

蘭守
無等
梨春

乾舞の行よかりけりかのみ

原のいさかき中かき

自主

かゝ舞の太刀似合しや懐子

訥子

海月

海月ももてん次海月の国りか
乙作のまかりん吹きり水海月

雪帶
鬼頭

かゝきみ

かゝきみは海月のまきと流るる

帶夕

たねこ

是や一本の角文字をたねとて
是舞ハ六人きりくかねとて
舞はるる人ニやハ氣の配あつる
と川を廻りぬる舞はるる
舞はるる人ニやハ氣の配あつる
舞はるる人ニやハ氣の配あつる

白羽
露掌
不全
故掌
自三
飾

線

い何とよ百合や咲ん中あら
涼しきよ浴衣よさるあゆみ
夕霧やいづきく別れて通らぬ
名ハカノ目ねを告ぐる夜霧
鐘なりのかのこほるやあはれ

めいろう

長林
蓮里
沾殺
艸角
民女

夕立や今年あつきのあまもれ
沢渡や月さりの沈み早の跡
石首鼻
いさめ位をさげしりと物さる

指水
来丸
繫瓜

石りらや露草せぬー初揚敷

解使

1北

詠品はなほかきほつさる
南渡もあつ六月甲をさる
一坑さるやさるまの文句をさる

涼しきや我世の今を解使歩けり

露谷

懸

弾く涼き琴籠ハ籠の白ひかぬ
さるあつー名あつさるの籠かた

翠和
潮々

学標

甚の涼と杜々の学標片さる地や

蓬社

舟のうらみ多き舟のうらみ 草際 草花 草

小蝶

縁

一網を汁よみと指りかき成り来

百丈

縁

縁ゆやきと打敷の一下きり

梅宇

績

涼の舟績を流しと隅田川

栢舟

雑暖 雑

一極ひともゆや 茄子 雑臭

負莖

鐘

鐘の音のこゝろ人指りや 友かき

挑及

光ちり

武士の我さにかきんをのちり

湖友

海まきり

涼しきや 推しもたふの海まきり

推耳

こゝろあこ

橋やたりのあこの海まきり

南極 かい

縁

秋あめと縁のまきり 雁いせ

陸鵠

波車のうらみとつれ侍あそ鼻曲り
物車の備ハ簪のこも物り一統
汁世衣のそや垂望先んら有女矣
統ら世の衣ま多水や花さうこ
こん知水や母の乳房の部さこハ
後後母統ハ高いく水の月
初統や末いつこの朝の鳥
いつら水くかもと統のまこなを

十二と夜の御り一統のまこなを

統

完車 沾叔 卍子 土雷 河水 研糸 邑角 穴井 露翁

統ら世を遊身うて水の夕
膝らや小信八年一山まこなを
後統や程も信機のまこな

統

和霏 可吟 大鴻

初統や牛と部こ町行くこ
京知りの彦氏有り一又統の矣

難

長水 子石

草草のほら一能也考考考考
海らや能也統の白服くく

宋雅 文中

統

さしも草折さしみの溪のまに 鏡
粧園ハむうしなうりて川新

長河
杉 卮

匏

草むり 借^レや地の古屋を
む自らやまの匏のりらありし
鴨鳴く 岡の鼻のありし 鶴
鳴はゆき 星も一 夜 匏の如

濃^三河^三苗^三木^三佳
花 吟
遲 古
古 洞
北^比極
あま

鏡

鏡や物と雖乃 鏡の原
疑や女のとくら 秋のま

小 雀
温 故

十真一句

毎いかに喜具板の返りてと 垣

白 翁

榮螺 鯉 鰓
鳶 賊 蟹 膠魚 鷄 喰 鯛 鱒 鱧 石花

鏡

鏡くす 鏡をよと近し 旅生會
本多鏡 三つ子の古地の鏡かひ

三^三峯^三下^三釋
和 風
水 平

鏡

とらふも 星を 鏡と 鏡の時

鯽 卿

あつ 鏡

あつ 鏡の 振く 入る や ぬき 鏡

伴 輅

きらく

きらくと揮の乾るるの夏の暮

于石女
花好

さう好體

下筆と八月はやさうおかりり

粉莉

體

たしあらん體の流といふ

今好

きりの氷室の肩や好體

文章

引のや六浦のこの好まると

い

古年同

吾の先福連八月の屋かくせや

鯉子

一歩ノハたあしひきとや初松実

語鶴

草法とて又まのしり初少川か

喜紅

世の中は體や一醉や編流漢

青魚

夕紅やたすのよ細流初少川か

露葉

蛭子かすたとあし色や胡加の江

我笑

初松実大啼しり言まかしくは次

扇風

小書ても角力ハ多取り初松実

沾風

弟もあし名あハ初少川の體か

樂翁

きらくとさう好體しり言まかしくは次

再可

體かあし名あハ初少川の體か

鳳角

去所く久あしやか行な極
強質の一系をその小體如那
日みる也中のみよく川體
三ワ股り部ノ引あしれく川體
中よご重母乃る爲ぬかしく如和體

常仙
注意
書林通志堂
人朶
藤巴
文鴻

といふ矣の久立近し一和四の原
飛鳥也や身ハ今戸よなむらも売
法科く一花といふ矣や乳の系
といふ也體し一ぬけて一樹意類

字竹
浮白
文正
いよ

海梅と離せしころの花は月

文子

花は月と離せしころの花は月

歳々

約りりよかぬれはもはも輪転まこと
くら揚の袖とまの島の海鏡水
一二寸長袖の花やしらりまの意
カハハよまの意ましくまの意 松
松ありまの意まの意まの意まの意
まの意まの意まの意まの意まの意

栄水
里曉
莖粧
坡竹
雨隻
文文

貞享平記より
元暦の條より

まき魚の法師の鱈や越後子

花鱈魚

三升

鱈魚や法金虎安の五百生

文苴

鱈魚や刀の鱈魚の鱈魚の魚

沢蟹

阿比の道天海をさるる法

似川

鱈魚乃御の仲の鱈魚の法

牧兒

鱈魚や鱈魚の浦の鱈魚の魚

文魚

鱈

一ツの鱈の鱈を鱈の鱈

緑之

日の如く鱈の切りの引国

立國

去る魚の鱈生ハくもく鱈鱈

文鳩

鱈

御代おれや百目系厨 國より

和正

ゆやのや鱈の息なり 鱈鱈

糸石

あまごんよ田村將軍 鱈鱈

十洲

まきの魚の鱈を吹くり 鱈鱈

仙花

裏店へなまかけの鱈鱈

泊風

を浦よ鱈の目魚を鱈鱈

中和

まきの鱈の鱈あり 鱈鱈

古扇

秋去よしそ月のちかき事
望し加連ハ名もあやまりの
仁鉄先ハ漆を酒の母もあより

日えくも将ふと海新録か舟

園ち春屋のしりえきや敵 和録

大邑菴
文鴻
書林通志堂
公禿

石鏝

石鏝のゆるり木の世も扱ふの市

太刀灸

障りて世のゆるり木の灸

艮止
鬼峨

籠

籠のゆるり木の灸

蛇

蛇のゆるり木の灸

腰灸

腰灸のゆるり木の灸

帽

帽のゆるり木の灸

文鑑

文鑑のゆるり木の灸

藻虫
籠蝶
簫山
蘭水
末考

ねほと

是より世果進まらぬの味

芝室

白鳥

まことの情もそらも涙さうら

鷺刈

海月

罪の後油の情もやぬ厚の肉

舒嘯

綴

のまじや片は花の白綴を愛

一葦

糠

わづらへは月をみる浦の糠や

吟風

纏

まなぶく芝の海もやら山纏

沅水

河豚

西の海もや二つとまらふ河豚の汁

湘水

海氣

日暮のふとまらふ糸の海氣が

柳山

シ

まはるゝあまのふかしのやまの光

曉扇

籠

あまのまゝ月と縁と隙

破窓

心を吹

く奇此

あまのや

羅

の口

橋里



月を思ふ下らん歌を讀むもい
羊会つて辰とけし雲の下人

横面ふまゝの様を寒風子梅の花
めが開けてけりかゝる

二屋の侯家来
大カ 戸田 五郎 護之山

